



Un Grand Amour de Beethoven

1960. 1~2

上映映画解説

No. 62

楽聖ベートーヴェン

Un Grand Amour de Beethoven

仏ジェネラル1936年度作

脚本・監督……………アベル・ガンス
撮影……………ロベール・ル・フェーブル
演奏……………バ里音楽院楽団
指揮……………フィリップ・ゴープル

——キャスト——

ベートーヴェン……………アライ・ボオル
テレズ……………アニー・デュコウ
ジュリエット……………ジャンニ・オルト
フランセーズィス……………ジャン・ルイ・パロー

1937年4月29日帝國劇場・武蔵野館・大勝館で封切

『楽聖ベートーヴェン』について

飯島 正

『楽聖ベートーヴェン』の監督者アベル・ガンスは、むかしからの映画ファンにとって、実になつかしい名前である。ぼくたちは無声映画時代に、彼の『戦争と平和』や『鉄路の白薔薇』を見て、まったく感激の涙をながしたものだ、ほとんど誇張なしにいてもいい。ことに『鉄路の白薔薇』は、フラッシュ・バックという新技術をあみだしたばかりでなく、無声映画時代を代表する傑作の一つであった。だがガンスは、そのつぎの作品『ナポレオン』で、トリプティック（三面スクリーン）をもちいて、現在のシネラマの先駆とはなったが、トオキイ以後は全然不振で、その初期の『世界の終り』は、おおげさで観念的で、むしろガンスのわるいところばかりがでた映画として記憶されている。だがぼくのノート（1937・3・29）には、こんなことも書いてある。

「……これは、ガンスの名をもちだすことすら気の毒なくらいのバカバカしい映画であった。しかし、こ

れとても、ガンスのある特質は立派にそなえていたのであった。つまり、世界の終りというような大問題にぶつかって行く胆のふとさである。」

だから、ぼくも『楽聖ベートーヴェン』に対しては、かなりの危惧と若干の期待をもっていった。なにしろ相手は音楽の神様なのである。こわいことはこわいが、これを映画にするところは、いかにもガンスらしいとおもった。その結果を、やはり前記のぼくのノートに見てみよう。

「これは、やはりガンスでなくてはできぬ映画である。ことにフランスにおいては、こういう伝記物——というより大上段のもの——はおおくはつくられないし、また不得手である。

だが

ガンスは……フランス人ばなれのした観念的なロマンチズムをもっているの、ベートーヴェンというような大人物に対しては、いかに映画化の野望は充分にうなずける。

しかし、ガンスとてもフランス人であるから、おなじ伝記的映画をつくるにしても、情緒的場面のない純粋に観念的な映画はつくりっこもない。

「むしろこの映画は、『楽聖ベートーヴェン』というよりも、原名どおりに『ベートーヴェンの偉大なる恋』と題すべきもので、ベートーヴェンと二人の女、ジュリエットとテレズの間柄を主としてえがいている。

「ベートーヴェンに扮したのは、アライ・ボオルである。達者なボオルはこのむずかしい役を立派にやりこなしているが、ぼくたちの頭のなかにえがくベートーヴェンとはいささかことなっていて、すこしうますぎる程度に、動きがおおい。だがこれも一つの解釈ではある。

ガンスの技術は、無声映画的なモンタージュにおいてすぐれているが、短所もまたそこにある。ベートーヴェンがつんぼになるくだりの技巧は、主観客観がいりまじっていて、感心できないが、結果はハッキリ印

象された。音楽は、フィリップ・ゴープルの指揮によって、みごとな効果をおさめ、ベートーヴェンの有名な曲を、つぎつぎにきくことができるが、その映画的处理は、すこし乱雑であった。せりふは、劇作家ステエヴ・パッサウルの筆になり、なかなか立派なものであった。ガンスの長所と短所のよくてた映画である。

大体このような映画だ。おそらくこれは、トオキイになってからのガンスの作品としては、芸術的価値をもつ唯一のものとおもわれる。戦後、彼の作品は、たった一つ、『悪の塔』が日本でも公開されたが、これもしよりのない映画であった。ぼくはこれを見たとき、ガンスの後退ぶりにおどろいた次第だが、仕事のないガンスとしては、このような俗っぽい作品もつくらざるをえなかったのだらうと解釈した。事実、彼は当時大分こまっていたようである。

しかし、ここ二三年來、ガンスはふたたびフランス映画界で問題になりだした。トリプティック式の「ポリヴィジョン」という大型映画の試作品などを発表して、ガンス健在の証拠を見せている。あいかわらずの大風呂敷らしいが、映画はまだまだ大風呂敷を必要とする。ポリヴィジョンというの、見てみたいとおもう。

最後に『楽聖ベートーヴェン』についての結論をつけるとすれば、無声映画時代フランス映画の先頭に立ったガンスとしては、それほどの映画ともいえないのだが、彼の無声映画時代のはなやかな成果の一部分はここに見ることができるし、ガンスでなくては不可能な大上段のきまりもついているし、なによりもまず、これはトオキイ時代における彼の唯一の代表作であり、今後ガンスの野心的な作品を見る機会があるとすれば、それとの連関を考えるうえにも立派に役立つ。いわばトオキイ初期の記念すべき映画として、これを見るのがまず至当であるとおもう。（1月31日、2月3, 7, 10, 14, 17, 21, 日の7回、毎回午後2時より上映）

国立近代美術館フィルム・ライブラリー